



有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.1

焼物の町有田は、日本で初めて磁器が焼かれてから今日まで、独特の歴史を持って生きてきました。その間厳しい自然や生活環境の中で、人々は常に創意工夫を重ね、技術の向上に努め生産を高めてきました。

この皿山びとの歌では皿山びとの暮らしを、古文書や写真などを加えてレポートしたいと考えています。日常の生活用具や生産用具などを中心に、現代の有田に住む人、有田を訪れる多くのかたがたに伝えていきたいと思ひます。

歳とりの行事

新年を迎えるにあたって家中の大掃除をしたり、餅つきをします。現代では出来上がりの餅を買うことが多いのですが、以前は軒先や土間で、家族総出で餅つきをしていました。餅飾りは三方の上に半紙を敷き、ウラジロの葉を置いて鏡餅を重ねます。餅の間にゆずり葉を置き、餅の上にはダイダイと干し柿を置いて出来上がりです。

そして、有田独特の飾りがもう一つの三方にする「オテカケの米」です。やはり半紙を敷き、すめ、昆布をたらしウラジロを置きます。その上に白米一升を山盛りにします。米の上に粟、ところ、木炭（半紙で包み、紅白の水引きをかける）、ダイダイ、いもがしらを置きます。これらにはそれぞれに「いわれ」があります。粟（カチグリ）、ダイダイ（代々）、炭（住む）ところ（所）、いもがしら（子だくさん）で子孫繁栄を願うものです。

この「ところ」は山でとれる野草の根で、根に多くの「ひげ」があり、老人に似ているので「野老」と書き、「ところ」と読みます。これを茹でると柔らかくなり、食べられますがとて



もにがいものです。昔の飢饉の時にはこの「ところ」を食べて命をつないだと語り伝えられ、これが食べられれば“本物の有田ンもん”ともいわれています。

この飾りは有田独特ですが、白米の上に正月にちなんだ目出たいものを飾る風習は、長崎では手掛け台（あるいは蓬莱ともいう）、伊万里では歳徳さんという呼び方で見る事が出来ます。

元旦は門戸をしめ、家庭に籠（こ）もって外出せず、静かに新年を祝います。2日は初詣で、初荷などが行なわれ、3日に初筆おろし、車おろしという新年の仕事初めの行事を行なっていました。これらの風習は各家庭、各地区で少しずつ異なるかと思いますが、時代の流れとともに忘れ去られていく皿山の歳とりの行事です。

たべものア・ラ・カルト



正月料理にも有田独特のものがあります。窯元では働く職工との契約「物前勘定」があったころは、大みそかは格別忙しかったので、おせち料理は手のかからない、包丁を入れればすむ生ものを中心に作られました。これは主婦の負担を少しでも軽くしようとした名残りです。一般的には黒豆の甘煮、ひやくひろ（鯨の腸づめ）、カズノコの三杯酢、カマボコ、アベカワ、戸矢カブの三杯酢、セッカ（生ガキ）やナマコの酢のもの、野菜の煮付けなどを皿に盛ります。

雑煮は「煮餅（にもち）」といって、焼かず煮ます。だしはカツオとシイタケ、具は白菜

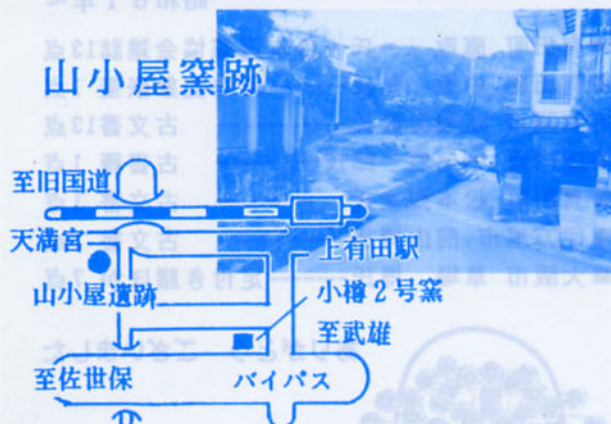
だけという質素なものでした。

もう一つ、有田の正月料理として、年とりイワシがあります。尾頭つきの生イワシをウラジロの葉の上に置き、七日正月に荒神さんのナマコ餅と一緒に食べます。これも元旦に食べる家もあり、各家によって異なるようです。このイワシは子孫繁栄を願う意味と、ぜいたくを戒める意味があるようです。この風習もやはり長崎や伊万里にもあり、長崎では「据えイワシ」、「からがきイワシ」と呼んでいるそうです。

これらの風習は長い年月の間にその地区や、各家庭の中で変化していきます。しかし、今も昔ながらに受けつがれているものも数多くあります。それぞれのお宅で受けついでいらっしやる風習、習慣をぜひお知らせください。

発掘レポート

山小屋窯跡



有田町教育委員会では昭和61年11月4日～昭和62年1月7日まで、上有田駅の西方にある山小屋遺跡の発掘調査を行ないました。これは新しく道路が出来る予定地内に、山小屋窯跡の物原（不良品捨場）があると考えられたため行なわれたものです。

山小屋窯跡というのは、江戸時代の初期に鉄釉の優品を焼いた窯として有名で、各種の美術書などでその製品が紹介されています。現在では山小屋窯の製品とわかる鉄釉の伝世品も、以前は石川県の吸坂焼であると考えられていました。

今回の調査では、窯跡や物原などは確認できませんでしたが、安政六年（1859）の「松浦郡有田郷図」に描かれている家屋の跡と思われる遺構が確認されています。家屋のあったと思われる場所は山を削って平らにし、石垣なども作られていました。

遺構からは当時の人々が日常使用していた陶磁器類や、古銭（寛永通宝）、かんざしなどが出土しています。その他どこかの窯から持ってこられたと考えられる不良品の陶磁器も多く、その中には絵付けを失敗した素焼なども含まれています。この点から考えると窯業関係の家であったかもしれません。



こういった幕末の製品のほか、山小屋窯の製品も多量に出土しました。おそらく山小屋窯の物原を削って整地した上に、家がたてられたためだと考えられます。山小屋窯の製品は、染付、青磁、白磁、鉄釉、黄釉、瑠璃釉、辰砂（釉裏紅）などの製品のほか、それらを組み合わせた製品も多く見られます。また、同時期の窯としてよく並び称される山内町の百間窯が大物を中心に生産していたのとは異なり、製品は小物がほとんどです。しかし、けっして技術的に劣っ



ていたということではなく、製品の質としては当時の最高峰の一つとして考えられ、有田を代表する窯とってよいでしょう。従来は鉄釉製品だけが特に有名でしたが、全体的にその技術水準の高さには驚かされます。

窯の操業年代についてはほかの窯跡の出土遺物との比較から1640年代～50年代前半ごろを想定していますが、今後窯跡や物原の調査でもっとはつきりとしてくるものと考えられます。

出土遺物は現在有田焼参考館で水洗いした後、分類して保管しています。また詳細な調査内容については、調査報告書が刊行されています。

印刷物紹介

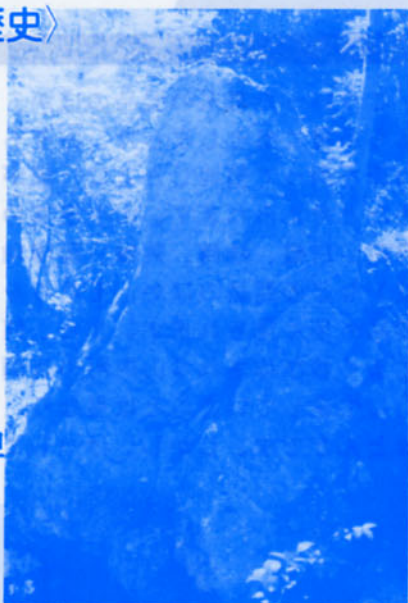
- ◆天狗谷古窯跡----- 定価5,000円
- ◆山辺田古窯址群調査報告書---- 定価5,000円
- ◆長吉谷窯跡----- 定価1,500円
- ◆小樽2号窯跡----- 定価1,500円
- ◆有田町史 陶業編Ⅰ、Ⅱ
 (既刊分) 政治・社会編Ⅰ、Ⅱ
 通史編 全巻予約定価3,000円
 分冊 定価3,500円
 別編 有田皿山の方言定価1,000円

以上の書籍を取り扱っていますので、ご希望のかたは民俗資料館にてお求めください。

〈街かどの歴史〉

麓の麓小山
 の麓小山
 大さきさ大
 村集、お品
 露餅）餅屋
 大さきさ大
 じり家の限
 中を野大地
 地群小お品

芭蕉句碑



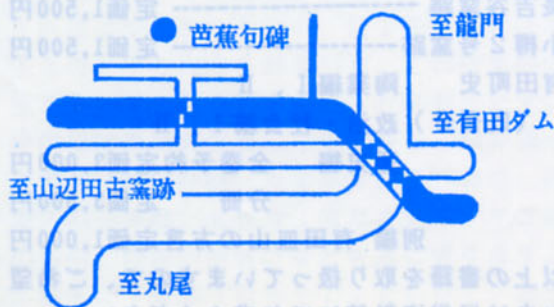
黒牟田地区には明治6年に黒牟田学校が出来て
 います。場所は陶山神社の西方丘陵の南東斜
 面にあったといわれ、今も地区の古老の話の中
 には「ガッコシタ（学校の下）」という地名
 が出てきます。この学校跡の上方にこのほど芭
 蕉の句碑が確認されました。高さ1.8m、ほぼ
 三角形の自然石の前面に

「春もや、気（け）しき調ふ月と梅」

の句が彫られています。元禄六年（1693）芭蕉
 50才の春の作です。以前から近くの大串さん
 や浦川さんらによって芭蕉さん参りとして花を
 供えたり、周囲を清掃してもらっていましたが、
 九州龍谷短大原岡教授の調査で江戸後期から幕
 末にかけての句碑だということが分かりました。

有田は俳句や短歌などの愛好者が昔から多く、
 芭蕉句碑もこのほかに、大樽の陶山神社や南山
 の天満宮境内にもあります。芭蕉は九州へ旅立
 つ途中で亡くなっており、蕉門の流れをくむ俳
 人たちが、この黒牟田の地に句碑を建てたのだ
 ろうということです。

皆さんの近くにもまだ知られていない石碑が
 眠っているかもしれませんね。



資料ご寄贈者名

昭和61年～

- 有田町 鷹取 一氏---日本窯業協会雑誌13点
- 有田町 中原 隆氏-----青白瓷象嵌壺 1点
- 福岡市 江藤彰彦氏-----古文書13点
- 山内町 中尾鹿一郎氏-----古書籍 1点
- 有田町 松本源次氏-----古文書 1点
- 伊万里市 前山博氏-----古文書 1点
- 大阪市 草場 博氏-----足付き膳ほか 7点



ありがとうございます

■おわび

広報ありた11月号6～7ページで文化財関係
 記事を編集しましたが、

「有田焼は西部から始まった」

の見出しのある記事の中で、

寛永14年（1737）→寛永14年（1637）

です。おわびして訂正します。

濃み筆のつぶやき

なんとか発行までこぎつけました。これから
 も皿山の四季のお便りを、生活や歴史の中から
 お届けしたいと思います。人類の半分は女性。
 その人類を支えている土台は“食”であるとい
 えば少々オーバーでしょうか。食文化という点
 でもこの皿山にはほかの町とは違う“なにか”
 があると思います。

しかし風習、習慣というのは各人、各家庭に
 よって有田の町の中でも異なります。「これに
 はこがん書いてあったばってん、ウチではこが
 んやなか。」ということもたくさんあると思い
 ます。どうか、そのようなことがらをどしどし
 ご指摘ください。お待ちしております。（葉）

有田町歴史民俗資料館報 皿山びとの歌 No.1

発行年月日 * 昭和62年12月28日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地

☎0955・43・2678